
僕は友達が少ないlif

赤司楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は友達が少ないi f

【Nコード】

N 6 3 9 7 Y

【作者名】

赤司楓

【あらすじ】

銀色の髪に碧緑の眼が特徴的な高校生――黒崎一護^{くろさき いちご}。

金髪碧眼が特徴的な高校生――柏崎星奈^{かしわさき せな}。

お互いの両親の勝手な理由で『許嫁』にされた二人。

しかし、この『婚約』に反対したのは黒崎一護だけだった。

柏崎星奈の方は本気で一護と結婚する気にいる。

果たして、一護は星奈との『婚約』を破棄する事が出来るか――。

『僕は友達が少ない』の二次創作です。

頑張って完結させる気ですので応援宜しくお願いします。

感想募集中です。

プロローグ：忍冬へスイカズラ（前書き）

宜しく願います。

プロローグ：忍冬ヘスイカズラ

銀色の髪を差してか、碧緑の眼を差してか、それとも冷めた性分を差してか、みんな俺を『氷のようだ』と言っていた。

それが原因かどうかは分からないが、俺には友達と呼べるような存在は数人しか居なかった。唯、俺は逆に友達が少ない方が居心地は良かった。別に格好つけてる訳では無い。俺は、人と話すのが少し苦手だ。『対人恐怖症』とまではいらないが、それでも普通の人と比べると、話すのが少し苦手だったと思う。

だから、“あいつ”が俺の『幼馴染み』だという事が、俺は苦痛で仕方がなかった。

だってそうだろう？ “あいつ”はこの学園の理事長の一人娘で、金持ちで、成績優秀で、運動神経抜群で、何でもすぐにこなせる天才肌で、容姿端麗で、巨乳だ。それで、性格が極度のナルシストで高飛車な女王様。

そして、一番最悪なのが俺と“あいつ”が『幼馴染み』で『許嫁』だという事だ。

勿論、俺はその事を『認めていない』。だから、“あいつ”も『認めない』と言ってくれたら楽だったのだが、楽だったのだが、……“あいつ”は満更でも無い様子で、俺達の親兄弟の前で満面の笑みを浮かべながら、こう言い放ちやがった。

『まかせといて!!』と……。

最悪だった。何が『まかせといて!!』だ。“あいつ”は一体何を考えてこんな言葉を言い放ったんだ……。

俺はあの時“あいつ”が口にした言葉を脳内で再生する。

――『まかせといて!!』

この一言で、たった一言で、僅か七文字で、俺の生活は激変した。俺が“あいつ”と『許嫁』になったという事は、三日も経たずに瞬く間に学園中に広まっていった。本当に最悪だった。“あいつ”の周りにいる変人（変態？）には嫌な眼で見られるわ、“あいつ”のファンクラブの会員共には訳の分からん抗議をされるは、クラスにいるモブキャラ共は、普段話し掛けてこないくせに、こういう時は面白半分で話し掛けて来やがった。

本当に迷惑な事だ。

俺は唯、平凡に生きたかった。

別に友達が少なくても『二人の親友』さえ居ればそれで良かった。お互いの両親の下らない『理由』で勝手に『許嫁』にされ、その『許嫁』の方は、本当にそれを真に受けて俺と本気で結婚する気でないやがる。

ああ、頭痛がする。

せめて高校では普通に生活したい。

恐らく、俺は“あいつ”――“かしわきせな柏崎星奈”と『許嫁』になった日の事を一生忘れないだろう。

『ねえ、一護、スケカズラ忍冬の花言葉って知ってる？』

ブローグ・忍冬へスイカズラ（後書き）

感想待っています。

第一章：隣人部発端篇：？：寝坊……？

眼を覚ますと、何故か金髪碧眼の美少女――柏崎星奈が俺に膝枕をしていた。……おかしい。昨日は確かこいつは俺の部屋に居なかった筈だ。なのに何で朝になったらこいつが居て、しかも俺に膝枕をしている？ いや、それよりこいつはどうやって俺の部屋に入ってきた？ 部屋の鍵は勿論、家の鍵も閉めといった筈だ。……こいつ、まさか鍵を壊して入ってきたのか？

俺は恐る恐る口を開く。

「……おい、何してやがる」

「あ、起きたの一護。おはよう、朝ごはん出来てるって“お母さん”が言ってたわよ」

こいつ、この状況で普通に『朝ごはん出来てる』とか言ってきたやがった。ある意味恐ろしい奴だなお前は……。

俺は部屋の扉を確認する。鍵は……壊れていない。……こいつ本当にどうやって俺の部屋に入ってきたんだ。

頭の中で色々思案する。

そこで俺は一つの可能性を思い付いた。

……まさか、母さんがこいつを家に入れたのか？ さっきこいつ『朝ごはん出来てるって“お母さん”が言ってたわよ』とか言ってたな。それってこいつは朝俺の母さんと話したって事でいいんだな。という事は、

「お前どうやって俺の部屋に入ってきた」

「え？ 一護のお母さんが鍵を貸してくれてそれで……」

「勝手に人の部屋の鍵を開けた、と」

「う、うん」

やっぱりそうかよ。

星奈が申し訳なさそうに言う。こいつでも一応は罪悪感があるみたいだ。罪悪感あるんだったらやらなきゃいいのに……。

「星奈」

「なに？一護」

「邪魔」

「っ!？」

俺の言葉に、星奈は硬直した。思ってる事言っただけなんだけだな。

星奈が硬直しているのを無視して俺は自分の意思で膝枕から解放される。

俺は後ろに星奈が居るのにお構い無く上半身裸になる。見事な胸板と腹筋……とまでいかないが、中途半端に鍛えられた胸板と胸板が顔を出す。

まあ、腹出てるよりは中途半端に鍛えられた胸板と腹筋の方がまだましだな。だからといって筋肉隆々も嫌だが……。

制服に着替え終わった俺は小さい鏡を机から取る。いつもと変わらない銀髪のツンツン頭、少しつり目で氷のような碧緑の瞳。はあ……、普通の容姿に生まれたかった……。

俺は後ろですっと硬直している星奈に眼を向ける。

こいついつまで硬直してる気だ。

「おい、星奈朝飯食いに行くぞ」

「……、」

反応無し。

面倒臭いなこいつ。

ドンッ!!

「いたあ!？」

容赦無い拳骨を星奈の頭に食らわす。

それを受けた星奈は少し涙眼になりながら、

「何すんのよ！ 許嫁の頭殴るってひどくない!？」

「うるさい、俺はお前を許嫁と認めた覚えは無い」

「何だよ!!」

「うるさい」

ドンッ!!

もう一度拳骨を食らわす。

「また殴った!!」

「今日もいい天気だな」

「さらっと流さないでよ!!」

部屋の窓を開け、空を眺める。うん、良い天気だ。外の新鮮な空気を吸う。今日も空気が美味しい。味無いけど……。

「朝飯食いに行くぞ」

「だから無視しないでよ!!」

星奈を引き連れて、俺はリビングに入った。鞆をソファの上に置く。ついでに星奈も。視線を家族に向ける。俺達を待たずに朝飯

を食っている。せめて俺達が来るまで待つとけよ……。

「あら、一護おはよう」

俺に気づいた母さんが挨拶してきた。

「母さん、」

「なに？」

「俺の部屋の鍵星奈に渡しただろ？」

俺の言葉に母さんは黙り混む。

いちにい
「一兄」

「あ？」

妹の夏梨が俺に話し掛けてくる。無視する訳にもいれないから夏梨の方に視線を向ける。夏梨は味噌汁を飲みながら、

「早くごはん食べないとちこくする」

「あ？」

夏梨は箸を時計に向ける。俺もそれを追って時計を見る。

八時五三分。

「はあ！？ 八時五三分！？ やべ！ おい、星奈朝飯食ってる時間は無え！！ 今すぐ学校に行くぞ！！」

「え？ 待つてまだ味噌汁飲んでーてちよお！？」

味噌汁を飲もうとしている星奈の手を無理矢理引っ張り、ソファに置いてある靴を二つ取り、玄関に向かう。未だ靴が捌けていない星奈を問答無用で引っ張り、俺達は外に出る。

「ちよつと一護！ まだ靴捌けてないって！！」

「それ所じゃねえ ! マジで遅刻するつつつてんだろ！！」

「タンジュンだねえ、一兄は、」

「助かったわ」

「いいよ」

「なんだかんだ言っても、いちおう星奈ちゃんの事大切にしてるのよね」

「そうだね……」

一護に手を引っ張られながら、あたし達は自分達が在籍している学園——聖クロニカ学園に向かっていた。

朝ごはん食べそびれちゃったけど、それを帳消しにできるほどの良いことが今起きている。

何年ぶりだろ？ 一護に手を引っ張られながら学校に行くのって多分、小学生低学年以来かな。

一護の銀色でツンツンした髪が激しく揺れているのが、視界にはいる。ついでにあたしの金色の髪も。

はつきり言って、かなり速いスピードであたし達は走っている。学校に着いた時髪すごい事になってるかも……。

正直言ってかなり疲れる。

「一護！ 速いって！！」

そうあたしが言うが、

「あ？ 結構スピード落としてるぞ？」

……いやいや、だいぶ速いから……。正直言って運動にかなり自信あるあたしでも一護に手を引っ張られてないといけないと思う。……そういえば、あたし一護に運動で勝ったことないな。勉強普通なくせに何で運動神経だけ良いのよ……。

「くそ、何で信号赤に変わんだよ……」

「やっと休憩出来る……」

「お前体力無さすぎ」

「一護が多すぎんのよ」

ジト目であたしが言う。

しかし一護は、

「いやいや、そんな事無えよ」

そんな事あるわよ。何で汗一つかいてないのよ。マラソン選手並みね。一護の体力の多さは。

……それにしても、制服着てる学生がやけに多いわね。ほんとに遅刻してるのかしら。

そんな事を考えていると、いつまにか信号は青に変わっていた。それを見た一護がクルリと首だけを動かして、あたしを見た。

「走るぞ」

「うん」

あたしは素直にうなずく。

再び、あたし達は走り出す。

……ねえ、一護？あんたは覚えてるか分かんないけど、小さい時はよくこうやって学校に行ってたよね？あたしは今でも鮮明に覚えてる。目をつぶれば瞼の裏に映像が流れる。……これ、さつきも似たような事言ったわよね？ まあいいか。

顔が熱いのが手に取るように分かる。

多分、顔がリングみたいになくなってるとるんだろっ。

いつから好きになったんだろっ……？

毎日見て、毎日遊んで、毎日聞いて、毎日……。いつから、意識し始めたんだろっ。あの時からかな……。一護が……。あれ、急にスピードが……。

「おい、大丈夫か」

「え？ 何が？」

「『何が』じゃねえよ。疲れてんだろお前」

「……疲れてないけど」

「嘘付け、何年お前と一緒に居ると思ってんだよ。お前の事なら知りつくしてる。歩いて学校に行くぞ」

そう言っつて、一護はあたしから手を話す。

「ちよっと待ってよ、遅刻しそうなんですよ？」

「ん」

一護が携帯電話を見せてきた。

八時 二分。

……なるほど、どおりで学生が多いわけね。

「……騙されたのね」

「ああ、騙された」

「……」

「……」

無言になるあたし達。夏梨ちゃん、そんな悪い子に育ってたのね……。

第一章：隣人部発端篇……隣人部……？

夏梨に見事に騙された俺達は、八時一五分と、かなり早くに登校してしまった。

まあ、それから色々あって、午前の授業を全て終えた俺は、一人優雅に昼飯を食べていた。

今日の昼飯はコンビニで買ったカツサンド、カップラーメン、缶コーヒー、ついでに食後のスイーツのプリン。うん、相変わらずよく食うね俺は。

そう思いながら、俺はカツサンドを頬張る。……うん、美味しい。やっぱり“肉”は良いな。“肉”は。

それから、五分程でカツサンドを平らげた俺は、ラーメンに取り掛かった。……良い香りだ。……インスタントだけどな……。

俺は麺を箸で掴み、口に入れる。

その瞬間、

ドドドドドッ！

ダッ！！

ガラッ！！

「一護！！」

柏崎星奈が思い切り廊下を走り、ドアを袂じ開けた。……おいおい、理事長の娘が校則破ったよ。いいのかよこれ。いいんだっただせこくね……？

「……何の用だ。俺は今忙しい。早々にこの部屋から出ていけ」

「これ!!」

おいおい、すげえな。堂々の無視だよ。

俺はラーメンを口一杯に入れて、

「ほわえふええわぁ。わぁふえへえ（お前すげえな。じゃあ出てけ）」

「なんて言ってるのよ!」

星奈が華麗に突っ込む。うん。突っ込みの才能あるんじゃないか

……?

星奈が机に一枚のプリントを置く。

「何だこれ」

「隣人部よ!! これこそあたしが求めていたものよ!!」

そう言いながら、星奈はプリントをバンバン叩く。

仕方ないから、俺はプリントを取る。

……。

そして絶句した。

何だこれ。つかおにぎりか……? 手足あるぞ。何処だよここ。

山の上か……?

まあいいや。

俺はそこに書かれている文章を読む。

『隣人部

とにかく臨機応変に隣人
とも善き関係を築くべく
からだと心を健全に鍛え
共に思い募らせ励まし合い
皆の信望を集める人間になろう!』

何だよこの訳の分からん部活は。星奈の奴ここに入る気じゃ無え
だろうな。

「……あ？ んだよこれ『ともだち募集』……？」

「一護も気づいたのね！」

「ああ」

「……地味なネタ仕込みやがって。

「で、何が求めていたもの何だ？」

「ともだち募集って書いてあるのよ！？ この部活に入ればともだちができるわ！！」

出来るのかよ。

「好きにしろよ」

ラーメンを食べ終えた俺は、デザートプリンを手取る。

「一護も入るのよ」

その言葉を聞き、俺は硬直する。

「……何言ってんだお前」

「言葉通りの意味よ。これ」

そう言って、星奈は入部届けを俺に渡す。

「まじで……？」

「まじ！！」

満面の笑みを浮かべ、星奈が答える。

「まあ別にいいか」

「……高校二年になって初めて部活というものに入る事になった……のか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6397y/>

僕は友達が少ないlif

2011年11月24日19時54分発行